

平成23年度

校内研究のまとめ

自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成

～つむぎ合う15年～



須崎市立上分小中学校

***** 目 次 *****

ページ

1	1. はじめに
2	2. 本年度の取り組み
	(1) 研究の概要
3	(2) 研究組織
4	(3) 研究構想図
5	(4) 研究内容
10	3. 二部会の取り組み
	(1) 学習研究部会
11	ア. 相互乗り入れ
	イ. 教科担任制
12	ウ. 全校授業研究
14	エ. クロス分析
16	オ. その他、小学校の取り組み
18	カ. その他、中学校の取り組み
20	(2) 仲間づくり部会
21	ア. 異学年交流
	かわうそ未来塾、清流を守る事業、
	人権平和学習、合同運動会、合同文化祭
26	イ. 交流授業・交流活動
27	ウ. 地域との連携
29	エ. Q-U
30	オ. 生活アンケート
33	4. 校内特別支援委員会の取り組み
36	5. 人権教育推進委員会の取り組み
37	6. おわりに

1. はじめに

本校は、平成16年度より小中一貫教育推進校となり、小中で研究テーマを統一し、小中併設と小規模校の特性を生かした研究を進め、今年で8年目を迎えました。

昨年度より、小中の校時表を小学校は45分、中学校は50分の単位に戻し、授業の質を今まで以上に高めることで、児童生徒の学力が向上し、教員の指導力も向上することを具体的目標として、研究テーマに即した実践を行ってきました。

本年度も、「なぜ」一貫教育なのか、「誰のための」一貫教育なのかを再確認しながら、小学校では新学習指導要領が完全実施され、中学校は来年度完全実施であることを意識して、「自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成」を研究テーマとして新しいメンバーを加えて、研究と実践に取り組んできました。詳しい内容については、各学年、各部会にゆずるとして、今、そのあゆみをふりかえってみると、小中の教師集団の力が結集され、真摯な取り組みがなされてきたことがうかがえます。

標準学力調査や全国学力状況調査等から、「学年による到達率のばらつき」「学んだことを使って考えること」「対人関係能力が弱い」「家庭学習の時間が少ない」等の傾向が見られます。言い換えると、子どもたちが生涯にわたって学び続けようとする姿勢がまだまだ育っていないことや、実社会で生きていく力が不足していることを意味していると言っても過言ではありません。

これらの課題を解決するための幾つかの具体的な取り組みを実践してきました。授業では、単に正しい答えを求めるだけでなく、「どこで間違ったのか、なぜ間違ったのか、どうして間違ったのか」という自分の思考の過程を振り返り、自分の言葉で発表したり、皆で考える場面を積極的に取り入れることで、コミュニケーションや言語化の能力の定着を図ってきました。

中学校では、1学期終了時に数学の授業について、全員で検証を行い、授業の質の向上と子どもたちの学力保障のために、どのような取り組みがさらに必要か協議し、具体的取り組みとして、2学期から、2・3年生の数学で習熟度別編成での授業を始めました。

また、小学校でも発表集会や新聞記事を取り入れた表現活動等の取り組みを常に検証し、改善策を具体的に実践していくことも始めました。

自分たちの取り組みを短い期間で検証し改善をしていく。つまり、PDCAサイクルをきちんと意識することを再確認した取り組みであったと言えます。

客観的なデータの積み重ねにより課題を明らかにして解決する姿勢が常に求められます。「やったつもり、わかったつもりで終わらない、やりっぱなしで終わらない」という共通認識を教職員が持たなければなりません。

目の前の子どもたちや教職員の実践には、まだまだ多くの課題が残されています。多くの課題に対して5W1Hを意識し、PDCAを確立した日々の実践の教育効果を高めることが求められます。

子どもたちの力が大きく伸びるよう、教職員がチームワーク（協働）で取り組んでいきます。

学校長 鍋島 智

2. 本年度の取組み

(1) 研究の概要

①研究テーマとテーマ設定の理由

ア. 研究テーマ

『自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成』
～つむぎ合う15年～

イ. テーマ設定の理由

本校は平成16年度から小中一貫教育推進校となり、小中で研究テーマを統一し、小中併設・小規模校の特性を活かして研究を進めてきた。一貫教育を教育的手法として、自尊感情を高め、仲間づくりや学力の向上、基礎基本の定着を目指してきた。その方策が中学校教員による教科担任制・小中教員による相互乗り入れ授業・異学年交流・中学校教員による小学校英語活動等であった。これらの一貫した教育活動により、標準学力調査・全国学力調査の結果で見られるように、学力面でも一定の成果を上げてきた。

本校の児童生徒は、明るく、素直であり、年齢差を越えて仲良くできる。また学校・家庭生活も全体的に落ち着きがあり、授業や学校行事も真面目に取り組める。しかし、幼い頃からほぼ同一の集団の中で育ち、対話をする他者の数も少ない中で、自己表現が十分でない生徒も多く、『自分の思いを豊かに表現できる』ことが課題であった。

その課題解決のために、平成20年度からは『自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成』を研究テーマに設定し、昨年度は研究テーマにせまるために、①生徒の主体的活動（児童生徒の活動を仕組み、児童・生徒が主体的に取り組む授業をめざす）②教員の授業力向上（児童生徒が達成感をもてる『わかる授業』に向けて、授業力向上の手立てをする）の二点を授業目標にして実践をした。

各学年各教科において、書く学習や発表による表現力の育成をはかり、集会などの発表の場では自分の言葉で発表できるように仕組み、一定の成果をあげることができた。しかし、年度の総括をする中で、聞く力や話し合いをするコミュニケーション力の不足など、これから取り組むべき課題も見えてきた。

そこで本年度も引き続き『自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成』を研究テーマに設定し、

- ・話を聞くことを意識的に行い、聞く力を育てること
- ・自分の意見を持たせてから話し合いの場をつくり、話し合う力を育てること
- ・行事等で仲間との関わりを増やし、コミュニケーション力を育てること
- ・児童生徒が達成感をもてる『わかる授業』に向けて、教員の授業力を向上させることを重点的に取り組んでいった。

以上がテーマ設定の理由であるが、小中一貫での研究を進めていく中で、小中別に取り組むべき課題もあり、今年度は小中別にサブテーマを設け、仲間づくりや学力向上など、それぞれの課題解決に向けて実践をした。

(2) 研究組織

教育目標

「人間性豊かな、活力ある児童生徒の育成」

研究テーマ

「自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成」

～つむぎ合う15年～

<小中別サブテーマ>

小学校・・・『自分の考えを持ち、発表できる』

中学校・・・『自分の考えを持ち、話し合うことができる』

一貫教育推進委員会

- ・学校教育活動全般についての協議・提案
- ・一貫教育推進のための企画・立案

二部会

学習研究部会

- ◎小中一貫教育の推進
- ◎基礎基本の定着と自学自習をめざす教育実践
- ◎表現力を高める教育実践

仲間づくり部会

- ◎認め合い、はげまし合う児童生徒の育成
- ◎一人一人の自尊感情を高める教育実践
- ◎コミュニケーション能力を育む教育実践

校内特別支援委員会

- 児童・生徒理解
- 特別支援教育の推進
- SCとの連携

■小中校内研の充実

- ・小中一貫教育の推進
- ・研究授業、校内研究の企画、実践
- ・家庭学習の質、量の向上をはかる
- ・学力向上の取組み

■調査研究

- ・学力に関する調査と分析
- ・クロス分析

■地域ぐるみ事業の推進

- ・清流を守る事業、文化祭等の企画立案、実践
- ・交流活動の企画

■調査研究

- ・生活実態調査、自尊感情アンケート等の実施及び分析と活用
- ・Q-Uの年2回実施と活用

人権教育推進委員会

- 人権教育の推進
- 人権教育カリキュラムの研究と作成

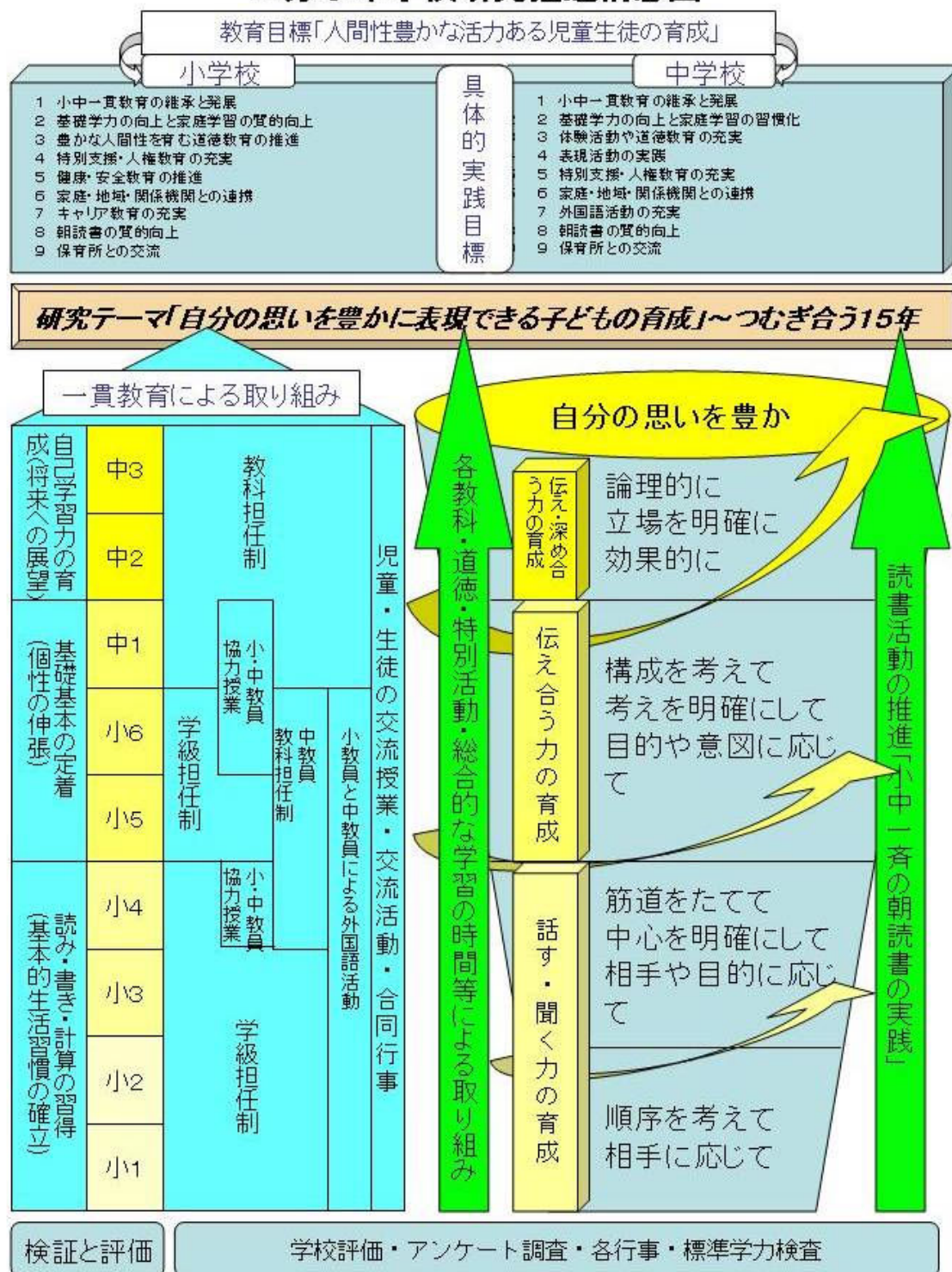
開かれた学校づくり・学校支援地域本部事業・体育後援会

※ 二部会・・・全教員が『学習研究部会』と『仲間づくり部会』に分かれて取り組む

- ・学習研究部会では主に学習活動を通して、仲間づくり部会では主に子どもたちのかかわりの中で研究テーマにせまっていく。

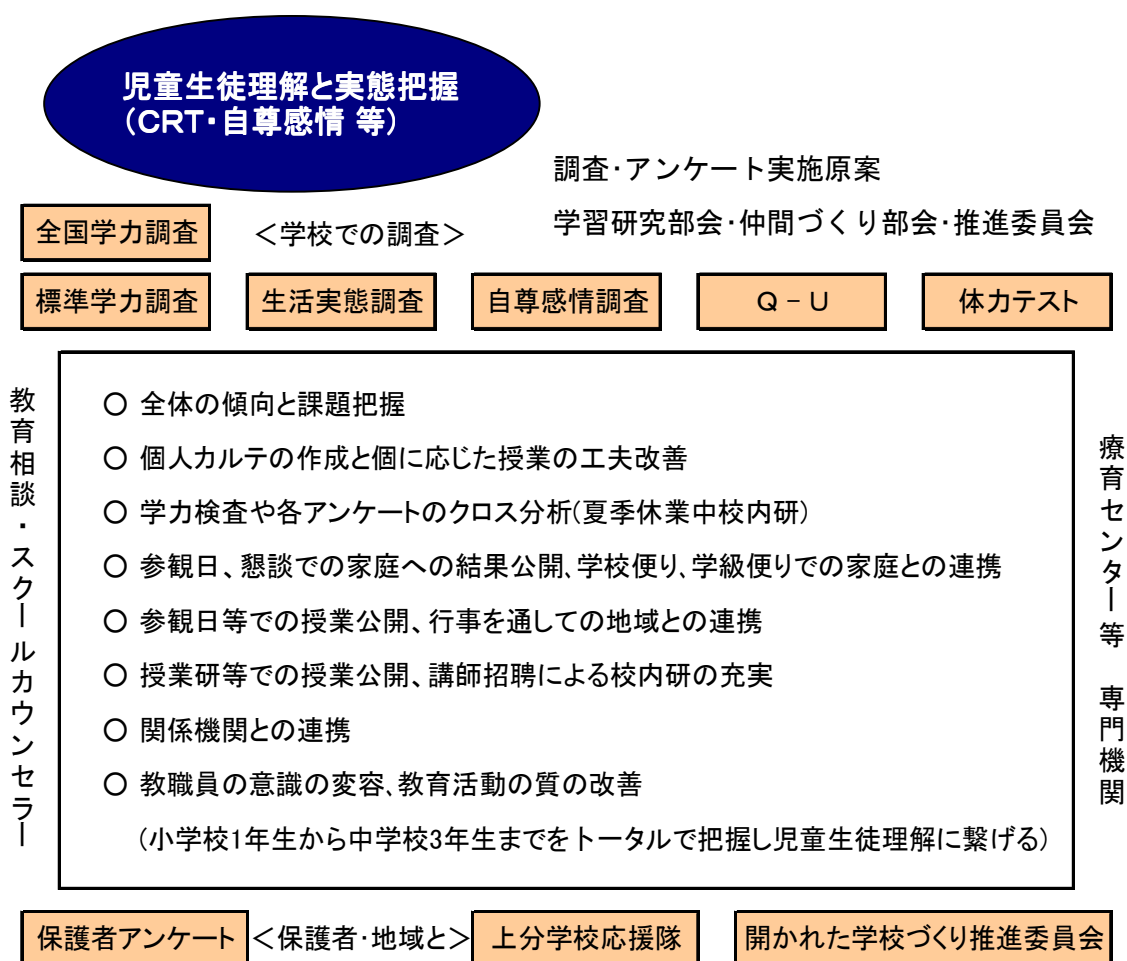
(3) 研究構想図

上分小中学校研究推進構想図



(4) 研究内容

① 実態把握



② 小中一貫教育の推進

本年度も小中一貫教育を教育的手法のひとつとして、教科担任制・異学年交流活動・相互乗り入れ授業等を実施し、テーマにせまる取組みをした。

教科担任制では昨年度に引き続き小学校高学年の図工・音楽で、新たに小4で理科を実施し、専門性を活かして各教科での表現力を高めていった、小学校外国語活動では昨年度実施した英語教員とのTT授業の経験を、小学5、6年生の外国語活動等に活かし、英語科としての表現力を高めた。

異学年交流活動では卒業学年として中3と小6を組み合わせ、それぞれの課題達成により表現力を高めていく。また年齢差が大きくなるよう小3と中1、小4と中2とで交流活動をしていく。行事における交流活動では、清流を守る事業、合同運動会、合同文化祭など、仲間づくり部会が中心になり、研究を進めていった。

相互乗り入れ授業では、中1ギャップ解消と基礎基本の定着に焦点を当て、小5・6、中1で、算数・数学・英語の授業の相互乗り入れをし、教科の専門性を活かすと同時に、小中連携を意識した取組みを実施した。

本年度の取組み（一貫教育）

教科担任制	小学校英語活動	交流活動	相互乗り入れ授業
図工（小5・6）	小1, 2（10時間程度）	・異学年交流（小3－中1）	算数（中→小5・6）
音楽（小5・6）	小3, 4（10時間程度）	（小4－中2）（小6－中3）	数学（小6担→中1）
理科（小4）	小5, 6（35時間）	・英語や地域との交流授業	英語（小5担→中1）

合同行事…清流を守る事業(7月)・人権平和集会(8月)・合同運動会(9月)・合同文化祭(11月)

③ 全校研の充実

一貫教育の推進により、校内研究では一貫教育の研究が中心になり、個人の資質向上、特に授業改善の面での研究が弱い傾向にあった。それをふまえ、授業において研究テーマにせまるなかで、児童生徒の主体的活動や学力向上をはかるだけでなく、教員の授業力向上をめざしてきた。今年度も研究授業は小中合同全校研として年間3回、あと小学校で全教員が研究授業を、中学校では全教員が公開授業を実施した。

小中合同全校研は、学習研究部会が中心となり、日程や内容の計画、指導案の検討をした。当日は講師を招聘し、授業の研究協議と講話をしていただき、内容を充実させた。

研究テーマにせまるための授業目標

<p>・生徒の主体的活動(表現)</p> <p>児童生徒の活動を仕組み、児童・生徒が主体的に取り組む授業をめざす</p> <p>・教員の授業力向上</p> <p>児童生徒が達成感をもてる『わかる授業』に向けて、授業力向上の手立てをする。</p>
--

ア、授業研の実施

<p>小中合同授業研の実施</p> <p>6月・中2社会（講師）熊岡 彰 指導主事『話し合いや発表を取り入れた授業改善の工夫』</p> <p>7月・小6算数（〃）山本千代 〃 『児童生徒の係わり合う力を育てる授業』</p> <p>10月・中1英語（〃）伊芸美紀 〃 『関わり合いながら、豊かな表現力を育てる授業づくり』</p> <p>小中学校別授業研…小学校は全教員が授業研を、中学校は全教員が公開授業を実施する。</p>

イ、校内研究（授業研以外）の実施

- ・学習研究部会、仲間づくり部会、特別支援委員会がそれぞれ中心となり、クロス分析や特別支援等について研修会を企画運営し、生徒理解を深めた。

④ 授業・自主学習に対する取組み

本校の児童生徒は、授業に集中して学習することができている。また家庭学習の定着率も高い。しかし内容を見ると、学習時間の絶対量が不足したり、取組み内容に個人差があ

ったり、指示したこと（宿題）しかなかったりなどの課題もある。

- ・家庭学習量が不足 ⇨ 生活習慣など個人理解を徹底し個人指導を入れていく。
- ・内容に個人差がある ⇨ 本人にあった自学の内容、量を提示し個人指導の徹底を図る。
- ・宿題しかない ⇨ 良い学習ノートを提示し、学級ごとに意識を高める。

小1から中3まで、共通の様式で、児童生徒の家庭学習時間（学習時間と時間帯、内容等）の調査を行い、学年・個人別の集計をし、夏休みの校内研で分析をした。

①

家庭学習時間調べ

かみぶん () がっこう () ねん し めい
上分 () 学校 () 年 氏名

☆ いえにかえってから、どれくらい おべんきょうしていますか。（べんきょうした時間の の中を、ぬりましょう）

() 月	あさ 5時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分	ひる 3時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分	よる 7時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分	下に つづく
	() 日	7時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分		
() 月 ようび	どんなべんきょうをしましたか。			
		きょうのべんきょう時間 ぜんぶあわせると <input type="text"/> 時間 <input type="text"/> 分		

() 月	あさ 5時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分	ひる 3時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分	よる 7時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分	下に つづく
	() 日	7時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分 時 10分 20分 30分 40分 50分		
() 火 ようび	どんなべんきょうをしましたか。			
		きょうのべんきょう時間 ぜんぶあわせると <input type="text"/> 時間 <input type="text"/> 分		

夏休みの校内研では、この調査だけでなく、標準学力調査やQ-U、生活アンケートなどをクロスして、学力や学校生活の気になる児童生徒について話し合った。

⑤ 学力向上の取組み

学力向上の取組みについて、小中別に取組んだことについては別項目で記述するが、小中共通する取組みとして、短時間テスト（二分間チャレンジ）を実施した。

二分間チャレンジは昨年度、小学校で実施し、計算力の向上が見られたので、今年度は中学校でも『正負の数』『文字式』『方程式』などの問題を作成し、実施した。小学校では低学年でも取組める問題などを増やし、今年度も実施した。

☆ 2分間チャレンジの実施例

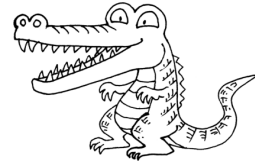
おもて

【問題用紙】

うら

2分間チャレンジ 【四則計算①】		氏名	正解数
1) $3 + 2 =$	41) $8 \times 4 =$		
2) $9 + 6 =$	42) $11 - 8 =$		
3) $14 - 2 =$	43) $5 \div 5 =$		
4) $20 - 7 =$	44) $13 - 7 =$		
5) $2 \times 6 =$	45) $9 \times 8 =$		
6) $3 \times 9 =$	46) $6 \times 6 =$		
7) $10 \div 5 =$	47) $45 \div 9 =$		
8) $12 \div 4 =$	48) $36 \div 6 =$		
9) $5 + 4 =$	49) $7 + 6 =$		
10) $7 \times 6 =$	50) $8 \times 9 =$		
11) $14 - 7 =$	51) $17 - 14 =$		
12) $35 \div 5 =$	52) $14 - 8 =$		
13) $20 - 9 =$	53) $9 + 7 =$		
14) $9 + 8 =$	54) $18 - 13 =$		
15) $4 \times 9 =$	55) $8 + 9 =$		

2分間チャレンジ 【四則計算①】		氏名	正解数
5) 1)	41) 32		
15) 2)	42) 3		
12) 3)	43) 1		
13) 4)	44) 6		
12) 5)	45) 72		
27) 6)	46) 36		
2) 7)	47) 5		
3) 8)	48) 6		
9) 9)	49) 13		
42) 10)	50) 72		
7) 11)	51) 3		
7) 12)	52) 6		
11) 13)	53) 16		
17) 14)	54) 5		
22) 15)	55) 17		



2分間チャレンジ 【四則計算①】		氏名	正解数
1) $3 + 2 = 5$	41) $8 \times 4 = 32$		
2) $9 + 6 = 15$	42) $11 - 8 = 3$		
3) $14 - 2 = 12$	43) $5 \div 5 = 1$		
4) $20 - 7 = 13$	44) $13 - 7 = 6$		
5) $2 \times 6 = 12$	45) $9 \times 8 = 72$		
6) $3 \times 9 = 28$	46) $6 \times 6 = 36$		
7) $10 \div 5 = 2$	47) $45 \div 9 = 6$		
8) $12 \div 4 = 3$	48) $36 \div 6 =$		
9) $5 + 4 = 9$	49) $7 + 6 =$		
10) $7 \times 6 = 42$	50) $8 \times 9 =$		
11) $14 - 7 = 8$	51) $17 - 14 =$		
12) $35 \div 5 = 7$	52) $14 - 8 =$		
13) $20 - 9 = 11$	53) $9 + 7 =$		
14) $9 + 8 = 17$	54) $18 - 13 =$		
15) $4 \times 9 = 36$	55) $8 + 9 =$		

2分間チャレンジ 【四則計算①】		氏名	正解数
1) $3 + 2 = 5$	5) 1)		
2) $9 + 6 = 15$	15) 2)		
3) $14 - 2 = 12$	12) 3)		
4) $20 - 7 = 13$	13) 4)		
5) $2 \times 6 = 12$	12) 5)		
6) $3 \times 9 = 28$	27) 6)		
7) $10 \div 5 = 2$	2) 7)		
8) $12 \div 4 = 3$	3) 8)		
9) $5 + 4 = 9$	9) 9)		
10) $7 \times 6 = 42$	42) 10)		
11) $14 - 7 = 8$	7) 11)		
12) $35 \div 5 = 7$	7) 12)		
13) $20 - 9 = 11$	11) 13)		
14) $9 + 8 = 17$	17) 14)		
15) $4 \times 9 = 36$	36) 15)		

2分間チャレンジ 【四則計算①】		氏名	正解数
1) $3 + 2 = 5$	5) 1)		
2) $9 + 6 = 15$	15) 2)		
3) $14 - 2 = 12$	12) 3)		
4) $20 - 7 = 13$	13) 4)		
5) $2 \times 6 = 12$	12) 5)		
6) $3 \times 9 = 28$	27) 6)		
7) $10 \div 5 = 2$	2) 7)		
8) $12 \div 4 = 3$	3) 8)		
9) $5 + 4 = 9$	9) 9)		
10) $7 \times 6 = 42$	42) 10)		
11) $14 - 7 = 8$	7) 11)		
12) $35 \div 5 = 7$	7) 12)		
13) $20 - 9 = 11$	11) 13)		
14) $9 + 8 = 17$	17) 14)		
15) $4 \times 9 = 36$	36) 15)		

問題を解く → 裏に答えがあるので → 折り返して → 採点する

記録表に記入する

2分間チャレンジ記録表		氏名											
	☆	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目	11回目	12回目
	実施日	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	正答数												
☆	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目	11回目	12回目	
実施日	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
正答数													
☆	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目	11回目	12回目	
実施日	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
正答数													
実施日	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
正答数													

☆二分間チャレンジ(にふチャレ)について

◇『基礎の基礎を早く確実に』として

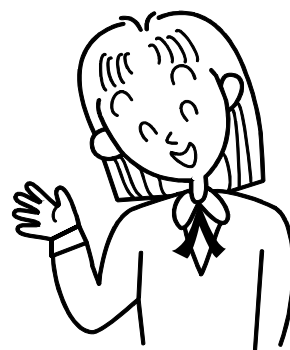
・例えば中学校の数学で、『 $2x + 3x - 4x$ 』が理解できても、 $2 + 3 - 4$ の計算に時間がかかる生徒と、すばやく正確にできる生徒とでは、授業が進むにつれて違いができてくる。それは分数の計算などでも同じで、通分のやり方が分かっても、4と6の公倍数が12だということを見つけれられるかどうかでその後の理解にも差ができてくるし、みんなが終わっているのに、一人だけ遅かったりしても自信をなくす(苦手意識をもつ)ことにもなる。

・二分間チャレンジは、基本的な四則計算などをすばやく正確に解くことが目的で、ドリル学習ではない。

◇『脳トレ』として

・100マス計算など、脳トレ系の学習がはやったが、脳を活性化させ、集中力をつける効果もあると思われる。

また、100マス計算は何度もやると苦痛になり、答え合わせもやりにくいということもあるが、二分間チャレンジではプリントを折り返すだけで簡単に答え合わせができ、印刷も簡単(同じ内容を裏表印刷し半分に切るだけ)で、違うパターンの問題も作りやすいという利点がある。



◇実施するにあたって

- ・記録表に記入して、はげみにする。『競うのは他の友達じゃなくて、昨日の自分』です。
- ・消しゴムは使わず、間違ったら×をして書き直す。
- ・2分以内に全問解けるようになったら、自分で時計を見て、終わったタイムも記入する。
- ・2分にこだわらなくてもよく、取組みの初めの頃や児童生徒の意欲によって、実施時間を変えてもよい。ただ、何度も実施するものなので、負担にならないように気をつける。

・2分チャレンジによって、計算の遅かった児童が意欲的に取組み、計算力がかなりアップしたことなど、よい成果がみられた。実施時間も2分と短く、自分で簡単に答え合わせができ、毎回自分の計算力が上がっていく達成感があることから、繰り返しの学習であっても長期間続けることができている。昨年度から2年間実施し、定着してきたので、来年度は問題用紙の種類を増やし、できれば算数・数学以外の教科の2分チャレンジを作成して、上分小中学校独自の取組みとして、児童生徒の基礎学力向上に役立てていきたい。

3. 二部会の取組み

(1) 学習研究部会

① 研究の内容

この部会は次の5つを柱に、研究を行っている。

- ・小中一貫教育の推進
- ・基礎基本の定着と自学自習をめざす教育実践
- ・表現力を高める教育実践
- ・教員の授業力向上
- ・ICTを有効活用する教育実践

また、小中校内研の充実、調査研究をはかるために次のことに取組んでいる。

- ・校内研の企画実践、研究授業の企画実践
- ・学習に関する調査の実施、分析
- ・学力向上の取組み
- ・家庭学習の質と量の向上をはかる取組み
- ・ICT活用力のスキルアップをはかる

② 経過

月	研究内容	実践内容
4	・4/20 第1回部会・体制づくり ・部会の研究内容決定 ・研究計画作成*全校研の企画・提案	4/26 標準学力調査(小) 5/6 標準学力調査(中)
5	・研究テーマに向けた具体的実践 ・5/18 第2回部会・授業研Ⅰの準備等	
6	・校内研1(授業研) ・6/29 第3回部会・夏期休暇中の校内研の立案 授業研Ⅱの準備等	6/15 全校研究授業Ⅰ 授業者・浅利 中2社会 *講師招聘
7	・校内研2(授業研) ・各種アンケートの実施と分析	7/6 全校研究授業Ⅱ 授業者・小田 小5算数 *講師招聘
8	・8/5 第4回部会・1学期の総括と2学期の計画 ・校内研3(生徒理解・・・クロス分析)	
9	・2学期の計画	
10	・10/5 第5回部会・授業研Ⅲの準備等 ・校内研4(授業研)	10/6 全国学力調査 10/11 全校研究授業Ⅲ 授業者・松本 中1英語 *講師招聘
11	・11/15 第6回部会・来年度の研究テーマについて ・実施内容の中間検証 ・『校内研のまとめ』執筆の分担	児童生徒の課題分析
12	・12/7 第7回部会・2学期の総括と3学期の計画	
1	・1/20 第8回部会・来年度の研究体制について ・『校内研のまとめ』作成開始	・小中別のサブテーマについて協議
2	・2/22 第9回部会・本年度の成果と課題について総括 ・『校内研のまとめ』完成 ・来年度の計画案作成	2/22 2部会総括 他に、合職・小中別職員会で総括

ア、相互乗り入れ

本校では、一貫教育のひとつとして、次の目的で小学校と中学校の教員が相互に授業の乗り入れを行なっている。

目的

- ・ 中1ギャップの解消に向けて、中学校教員が小6算数と外国語、小5算数、小5担任が中1英語へT2として授業に入っている。
- ・ 中学校の教員が小学校の児童を知ることで入学後スムーズに受け入れることができる。また、小中学校の教員が連携することで、児童・生徒の情報や変化を共有する。
- ・ 小学校教員は、卒業させた児童が中学校でどのように学習をしているのかを知り、小学校での実践を反省し、成果と今後の課題をつかむ。

成果と課題

- ・ 中学校でスムーズに学習を進める上で大切なことや、小学校時代に育てておかなければならないこと（身に付けておかなければならないこと）が見えてきた。
- ・ 中学校入学時から「チャイムと同時に授業をする」学習するスタイルが取れるように、小学校教員も意識をして実践をした。
- ・ 中学校教員が教科担任制で小学校の授業をしている時間帯に、小学校教員が中学校に乗り入れるようにしているので、学校行事等と重なることも多かった。日々の変更は、担当どうしの連絡調整が必要である。

イ、教科担任制（中学校教員による小学校での教科担任制）

今年度も小5・6年生の音楽と図画工作で教科担任制を実施したが、今年度は新たに小4の理科を中学校教員が担当した。

小学校の音楽や図画工作では中学校の授業と共通する部分が多くあり、児童のつまずきや苦手になっているところを早い段階で把握することができ、長い期間を見通し、基本的なことから積み上げることができている。器楽合奏や合唱についても、それぞれの児童の特性を理解し、より細かな指導を行うことができた。

中学校へのスムーズな移行もうまくいっている。小学生のときに習った教員と続けて授業をすることで、特に意識もせず中学校の音楽の学習をし、図工も美術にうまく移行している。また、日々小学生と接することで中学校入学前の様子が分かり、生徒理解が深まることや、楽器や道具の使い方など技術面での発達段階を知り、授業を見直すことができることなど、授業改善でもたいへん役に立っている。

小4理科では、中学校で学ぶ内容と関連した学習も多く、繰り返しながら学習していることを再認識したり、全国的に中高生の理科離れがいわれているなか、小学生の興味関心の高さや実験・観察に活発に取り組む姿をみて、この気持ちを大切にしなければと実感したり、初めて小学生を教えたことで学んだことも多くあった。また、小学校の各学年が新聞の書き取り学習を始めたこともあり、理科でも自分の考えをまとめて文章に書けるようになってきた。

ウ、全校授業研究

【授業研究の進め方】

a 事前研究

授業者の思いを大切にしながら、研究テーマ「自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成～つむぎあう 15 年～」にいかにして結びつけるかブロックや部会、校内研でその都度教材研究を行った。授業のねらい・流れなどみんなの共通認識をもって授業を組み立てていった。

b 研究授業の参観について

参観者は、グループ別にそれぞれの視点に沿って授業参観をし、授業後の研究協議を深めるようにした。

Aグループ	授業者の授業計画や準備に関わることを主な視点に 教材の工夫、板書の工夫、時間配分、機器の活用
Bグループ	授業者の授業実践に関わることを主な視点に 発問の工夫、生徒の発言の活用、机間指導、評価
Cグループ	児童生徒の活動に関わることを主な視点に 生徒の活動、かかわり合い、発表
Dグループ	児童生徒への支援を主な視点に 学習の支援・配慮が必要な生徒への手立て

c 事後研究について

研究協議

- ・授業者より
- ・授業評価表を参考にグループ別協議→発表（質問も含む）
- ・講師より
- ・質疑等
- ・まとめ

d 全校授業研の実践報告

中2 社会科 研究授業

6月15日には、中学2年生社会科「欧米の社会進出 アヘン戦争」（授業者 浅利浩司）の研究授業を行った。

授業後は、小中学校の教員で授業の内容について視点にそった研究協議を行い、中部教育事務所の熊岡 彰指導主事より指導助言ならびに講話を頂いた。



授業は、「アヘン戦争の原因について考察し、図や資料を用いて説明すること」がねらいであった。

研究協議より

- 「生徒への問いかけが多くなり時間が不足する。」⇒「教え込むところと考えるところを明確にしておく。」
- 「生徒の発言が単発になる。」⇒「高める、ゆさぶる切り返しや、発表の増える工夫をする。」
- 「発表者が限られていた。」⇒「班の中で練習する活動を取り入れる。」

その後『話し合いや発表を取り入れた授業改善の工夫』というテーマで話しをお聞きし次の事を学んだ。

- 「何を話し合わせ発表させるのか」については、しっかり教え、しっかり引き出す指導のポイントを整理すること。
- 基礎的・基本的な知識・技能、学び方はしっかり教え、関心・態度、資質・能力はしっかり引き出すこと。
- 単元計画の具体例等
- 「主体的で楽しい話し合い・発表」については、①話し合いや発表の必然を作る②言語活動を活発にするための様々な工夫について
- 社会科における言語活動のポイントとして、言語活動を通して社会的な見方や考え方を育成していくことが重要である。

小6 算数科 研究授業

7月6日に 全体の量を比例配分し、問題を解決することができるというねらいで「比の表し方を考えよう」の研究授業（授業者 小田隆文）を行った。

研究協議より

- 「解き方が1つの考えだけであった。」⇒「ヒントを与えて多様な考えを引き出す。」
- 「行き詰まっている児童への働きかけが少ない。」⇒「机間指導を多くし、アドバイスや評価を入れる。」
- 「1つの班の説明で終わっていた。」⇒「間違いを確認する作業を通して関わりを深めていく。」



その後、中部教育事務所山本千代指導主事から『児童の関わり合う力を育てる授業』というテーマで講話をしていただき次のことを学んだ。

- 児童生徒が関わりあうには、まず自分の考えを明確に持つこと
- そのために自力解決を支える支援の工夫が大切であること。
- 具体的な支援の方法と考えを広める学習の場の設定
- 子どもたちへの語りかけの言葉等について
- 授業を支える学級づくりの大切さ

中1 英語科 研究授業

10月11日には、中学1年英語科の研究授業（授業者 松本直子）を行った。・間違いを恐れず、自分の言いたいことを積極的に相手に伝えようとする事・相手の言っている内容を理解し、適切に応える事・本文内容理解では、多少忘れた単語があっても、ポイントをつかみ、答えることがねらいであった。

授業後の研究協議では、「活動がパターン化されていて、子どもがよく理解できていた。」「活動が細かくあり、肯定評価が多かった。」「教師主体であったので、生徒主体になると良い。」「自信を持って発表できていない。」⇒「ペア発表を取り入れる。」等活発に話し合いが行われた。

その後、中部教育事務所 伊芸美紀 指導主事より『関わり合いながら、豊かな表現力を育てる授業作り』というテーマで講和をいただき次のことを学んだ。

- 表現力とは自分の思いを正確に相手に伝える能力であり、豊かな表現力とは、表現内容を豊かにすることと表現技能を豊かにすることがあること
- 外国語教育を通して表現力を豊かにする関わり合いについて
- 学習指導要領の改善の基本方針と、改善の具体的事項について
- 外国語教育における小中連携については、「小学校でやったことが、中学校でも役に立った」という子どもの実感が大切であること、そのためには、「情報交換」から始め「交流」「カリキュラムの連携」が大切であること

エ. クロス分析

6年前から夏期休業中の1日をクロス分析の校内研として設定し、児童生徒理解と課題解決のための研究をおこなってきた。標準学力調査、生活実態調査、Q-U、家庭学習調査、自尊感情アンケート等の結果と、学級での学習状況や生活態度等をクロスさせ、全教員で分析するなかで、学級と個人の理解を深め、今後の改善方法について話し合いを持ち、次に活かす取組みをおこなってきた。

☆ クロス分析に向けて、資料の作成

- ・小学校・・・学級ごとに『夏休み研修 クロス分析』シートの作成

標準学力調査結果(算・国)・家庭学習のようす・生活のようす・Q-Uについて、実態と課題・具体的な取組みをシートに記入する。学級の傾向と、支援を要する児童について作成する。

- ・中学校・・・国数理英で『標準学力調査より(クロス分析資料)』シートの作成
標準学力調査結果(国・数・理・英)について学年別に、傾向と対策を具体的に教科担当が記入する。
支援を要する児童について、標準学力調査結果・家庭学習のようす・生活のようす・Q-Uについて、実態と課題をシートに記入する。
- ・学習研究部会・・・標準学力調査の結果一覧(小1から中3までの素点とグラフ)、家庭学習調査の集計表、クロス分析用シートの依頼、
- ・仲間づくり部会・・・生活アンケートや行事でのアンケート等の集計、学級ごとのQ-U一覧表、家庭学習やTV視聴などの家庭生活時間調査集計表など

☆ クロス分析の校内研・・・8月3日(水)

○ 午前の部(9:00～12:00)

小中学校別で実施。小中それぞれの問題点等について話し合いをもった。

- ・学級、個人の分析(標準学力調査、家庭学習調査、生活調査、Q-U他)
- ・「これからの指導・支援」に重点をおいた、具体的な話し合い

○ 午後の部(13:30～15:00)

小中合同で実施。小学生について中学校教員と一緒に考えることで、児童の抱える問題点等について中学生になっても継続して対応でき、中学生については小学生の頃の話など、小学校教員の視点からアドバイスを受けるなど、一貫教育の良さを活かした話し合いができています。

- ・小学校からの報告 * 各学年から学級・個人について報告
* 全体での話し合い結果の報告
- ・中学校からの報告 * 各教科からの報告(国語→数学→英語→社会→理科)
* 全体での話し合い結果の報告
- ・全体を通して * 意見交換、質疑
* 一貫教育の検証、学力の状況、中1ギャップ解消について他

☆ 成果と課題

学力調査や生活調査などの資料や、生活態度などをクロスさせ、学級や児童生徒の課題を探り、解決に向けた指導方法を協議して実践していくという校内研のスタイルも定着し、本校にとってとても重要な研修日となっている。小中合わせて9年間の資料をもとに、小中学校の教員がそれぞれの視点で意見交換ができるのも小中一貫教育の良さであり、資料作り等、準備に労力がかかるが、これからも工夫・改善をしながら続けていきたい。

オ、その他、小学校の取組み

☆研究授業

研究テーマ『自分の思いを豊かに表現できる児童生徒の育成』達成に向け、昨年度に引き続き、今年も各学級研究授業に取り組んだ。本年度は目標を絞り込んだサブテーマに「自分の考えを持ち発表できる。」を設定し、授業の展開にはテーマを達成するための活動(自分の考えを伝え合ったり、学びあったりする場の設定)を盛り込むこととした。参観者は、グループ別にそれぞれの視点に沿って授業参観をし、授業後の研究協議を深めるようにしてきた。

年	月	日	曜日	校時	区分	学年	教科等	授業者	単元名	講話	助言者
23	5	17	火	2	授業研	小1	国語	谷脇智代 島田かや	「じをかこう」		
23	7	6	水	5	全校研	小6	算数	小田隆文	「比の表し方を考えよう」	「児童生徒の 関わりあう力を 育てる授業」	中部教育事務所 山本千代指導主事
23	9	28	水	5	授業研	小4	国語	西村明代	「文末の言い方に 目を向けよう」		
23	10	19	水	5	授業研	小5	国語	堀内美佐 宮崎由美子	動物と人間の関わり を書いた物語を 読もう「大造じいさん とがん」		
23	11	1	火	5	授業研	小3	社会	高石 学	「調べよう物を作る 仕事」		
23	11	30	水	2	授業研	小2	算数	石田ひとみ	「九九をつくろう」		

小2 研究授業

小1 研究授業

小5 研究授業



☆発表集会

毎月第3金曜日を発表集会とし、学級で学習してきたことを発表する場として設定した。今年度は、特に感想の部分に重点を置き、同じ発表を見て感想を伝え合う中で、感想をふくらませ、表現の仕方を学び合えるように取り組んだ。

月日	学年	内容
5月27日	4年	音読
6月17日	5年	音読
7月1日	6年	修学旅行についての発表
11月18日	3年	音読
12月21日	2年／5年	音読／来年の抱負を漢字一文字で
1月27日	4年	短歌を詠む
2月17日	1年／3年	詩の朗読・ピアニカ演奏／総合学習の発表

小4 発表



小3 発表



小6 発表



☆朝の帯タイム

今年度から校時表を変更し、朝10分間の帯タイムを設定した。この時間は、それぞれの学級の実態に合わせて、基礎学力の定着のために活用した。

<取組んできた内容>

- ・にふチャレ
- ・100マス計算
- ・ミニプリント
- ・読み聞かせ
- ・計算カード
- ・音読
- ・朗読

☆ 新聞記事まとめ

2学期より標準学力テストの結果から、読み取る力・書く力に課題が見つかり、その課題解決の方法として取組みを始めた。毎週水曜日の帯タイムに新聞記事の要旨をまとめ、感想を書くことで要旨を読みとる力や自分の考えを言葉にまとめる力を育てている。

☆ いのちの学習

自分の思いを安心して発表できる環境として、相手を大切にする心を育てることをねらい命の学習を行った。養護教諭と連携し系統立てて学習を組立て、実施した。

☆ 「ことばのきまり」の活用

各学年個人に冊子を持たせ、学習に取り組んだ。

成果と課題

研究授業では、授業を研究討議することで、授業の力がついていった。授業を見る視点を再度考察し、次につながる事後研究にしていくことが課題である。発表集会では、全校の前で発表することで練習に取組み、しっかりとした発表をしようとする態度が育ってきた。また、感想を発表するので聞き方が良くなり、自分の言葉で感想を言える児童が増えてきた。しかしまだ、友達の感想と自分の感想を比較しながら同じ考えならば賛同するというような段階にいたっていない。今後は他人の意見と比較しながら聞くなどの能力を高める必要がある。新聞記事まとめでは、回数を重ねることで、内容の要約がスムーズにできるようになってきた。また、記事に対して何らかの考えを書くことが出来てきた。継続し取組むことで、記事についてまとめる力・考えたことを書く力を伸ばしていくことができると思われる。いのちの学習の取組みを始め、系統立てて学習を行うことで、友達や自分の命を大切にするを考える学習の機会を与えることが出来た。学習したことが児童の生活に生かされるように、指導内容や方法を改善していくことが課題である。

カ. その他、中学校の取組み

☆ 研究授業・公開授業

今年度も全教員が研究授業（または公開授業）を実施した。公開授業の参観体制や事後の研究協議等について、有効な実施方法を検討しながら、来年度も実施したい。

年	月	日	曜	区分	学年 教科等	授業者	単元名・題材名	講話	助言者
H23	6	15	水	全校研	中2 社会	浅利浩司	欧米諸国の世界進出 『アヘン戦争』	話し合いや発表を取り入れた 授業改善の工夫	中部教育事務所 熊岡 彰
H23	9	9	金	公開授業	中1 美術	橋村政海	キャラクターデザイン		
H23	9	13	火	公開授業	中1 保健	秋田敏恵	健康な生活と病気の予防 『歯周病の予防』		
H23	9	30	金	公開授業	中2 国語	木俵一乃	古典を楽しもう 『平家物語(那須与一)』		
H23	10	11	火	全校研	中1 英語	松本直子	Assistance Dogs	関わり合いながら、豊かな表 現力を育てる授業づくり	中部教育事務所 伊芸美紀
H23	10	21	金	公開授業	全学年 体育	森木仁美	球技(ネット型) 『バレーボール』		
H23	11	25	金	公開授業	中2 理科	畑山時子	化学変化と分子・原子		
H23	11	29	火	公開授業	中1 数学	中越久志	対称な図形の性質		
H23	12	6	金	公開授業	中1 音楽	中岡慎二	曲のイメージを感じ取ろう 『魔王』		
H23	12	13	火	公開授業	中1 技術	片岡則彦	立体を平面に表そう		

☆ 加力学習の取組み

今年度も長期休業中の加力学習に加えて、定期テスト週間中にも全校で加力学習に取り組んだ。

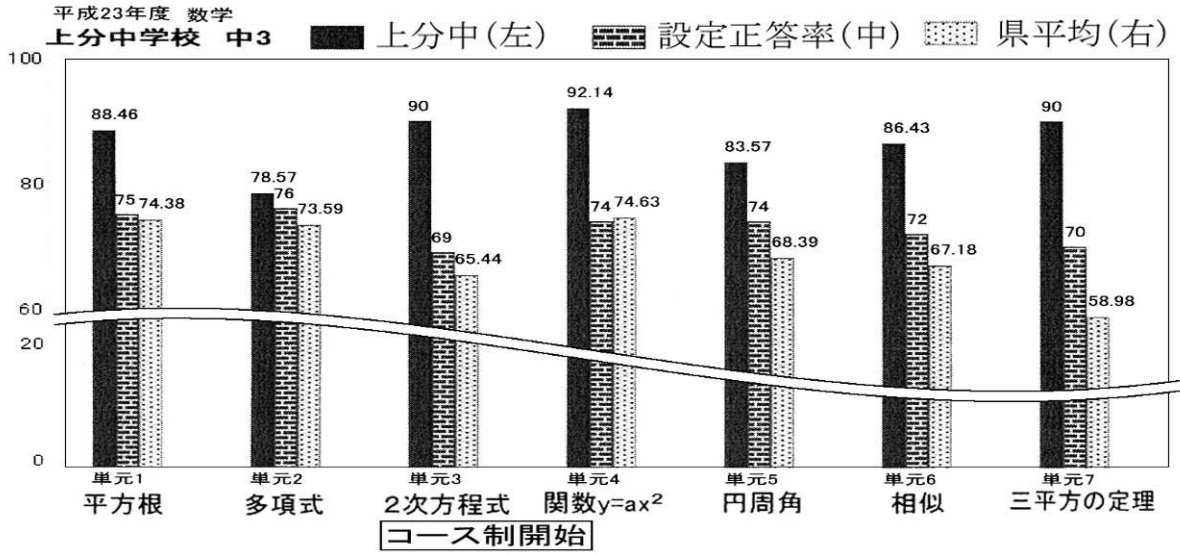
- ・ 中間・期末テストの部活動停止期間に、放課後50分程度の加力学習をする。
- ・ 長期休業中にも加力学習に取り組む。
- ・ 3年生は部活動引退後の11月から、放課後の加力学習に取り組む。

希望者で実施したが、ほぼ生徒全員が残ってテスト勉強に取り組んだ。教員も全員が教室に行き支援をした。よい効果が見られたので、来年度も引き続き実施していきたい。

☆ クロス分析後の取組み

8月3日の校内研修でクロス分析をし、学習面での課題について話し合った。その中で数学の学力向上について検討した結果、2学期から2・3年生をそれぞれ2クラスずつに分け、コース制で授業を行うことにした。2学期が始まるとすぐに生徒・保護者に要旨を伝え、希望により2コースに分け、3年生は9月第2週から、2年生は運動会終了後から授業を開始した。

下のグラフは中3数学・単元テストの結果であるが、中2・中3ともに学力の向上が見られ、コース分けは効果的であった。



☆ 全教員による 定期テスト結果の分析

今年度は、中間期末の定期テスト後に職員会をもち、テスト結果について全教員で検証し、学力面で支援が必要な生徒や、学力向上の授業改善が必要な学年・教科について話し合い、その中で出された方法を実践していった。下図は国語の授業改善計画の一部だが、職員会にはテスト結果の一覧表だけでなく、苦手分野の分析や授業の改善方法をまとめた資料を出してもらい、全員で検討した。

〈国語〉中学2年生
「平成23年度全国標準学力テスト」(4月実施) 結果の分析と対策

(1) 今回の結果
4月学力テスト正答率度数分布

割合	人数
<50%	3人
<60%	4人
<70%	4人
<80%	2人
<90%	2人

平均: 62.0 最高点: 87.1 最低点: 40.3
前年度全国平均: 70.5 前年度校内平均: 73.4

今回の平均は62.0で、前年度の校内平均73.4前年度の全国平均70.5から大きく差をつけられている。

(2) 苦手分野、対策の求められる分野(課題)

分類	区分	期待正答率	平均正答率	
			校内	前年度全国
基礎・活用	教科全体	71.1	62	70.5
	基礎	74	61.3	72.9
	活用	61.4	64.8	82.1
	活字と・聞くこと	70	72.5	77.5
領域	読むこと	63	46	72.2
	読むこと	67	69.7	67.4
	言語事項	78.3	58.9	70
	国語への関心・意欲・態度	60	45.3	70
観点	話す・聞く能力	70	72.5	77.5
	書く能力	60.9	45.8	68.7
	読む能力	67	69.7	67.4
	言語についての知識・理解・技能	77.9	58.5	70.2

前年度の全国平均値と特に大きく差をつけられたのが【書く能力】と【言語に関する知識・理解・技能】である。差が20%と大きい「書く能力」の向上対策も必要だが、言語についての力が不足しているのも見逃せない。中学2年生となった今年度は、国語文法の中でも重要な位置にある品詞のほとんどを1年間通して詰め込むことになるため、しっかりと理解させなければ来年度の入試への影響も大きい。今後、品詞を学ぶ上で大きくなる言語事項への苦手意識を取り除くとともに、実力をつけさせなくてはならない。

(3) 苦手分野克服のための対策

○言語に関する知識・技能

【読書】

- 小説・説明文の単元で、意味調べ&例文作成を行っている。テストには選択式で答えさせるよう出題していたが、1学期期末テストからは記述式での出題にする。(書く能力への向上にもつながる)
- 文法への対応は、プリントを何度も解かせ、問題を多くこなすことで力をつけさせている。
- 中間テストの出来はよかった。(プリントは基礎→実力問題)
- 今後、古文・漢文を学ぶ点でも基礎知識をしっかり身につけさせたい。

○書く能力

【共通】

- 問題文に即した回答ができないというケアレスミスが目立つため、基本的な回答の仕方を教える。(～こと。～から。(理由)、句読点、何十字以上何十字以内、抜き出しなさい、など)

【論説文】

- 筆者の主張がどこにあるのか、などの文章内容を授業プリントを使用して効率よく学ばせる。(意味段落に自分で小見出しをつけさせたりする)
- 必要な言葉を文章中から捕って、説明する力をつけさせる。

【小説】

- 登場人物の気持ちや考えを読み取り、説明する力を育てる。(朗読劇→プリント)

○全体的な学力の向上

夕学活の時間に5～10分程度で解けるA6サイズのプリントを解かせる。
ノート・授業用プリントを使った勉強法の指導。

(4) 目標
平均65～70%を目指す。

(2) 仲間づくり部会

① 研究内容

本年度も認め合い励ましあう児童生徒の育成を目指し、自尊感情を高め、コミュニケーション力を育むための教育実践に取り組んできた。

例年行ってきたことではあるが、地域ぐるみで行っている「清流を守る事業」や「小中合同運動会」「合同文化祭」など多くの行事に取組、その取組と平行して、全学年 Q-U 調査を実施し、本校で行っている生活実態調査と関連付けて、児童生徒理解・実態把握を行い、各学級で児童生徒の実態に合わせて自尊感情を高める取組みを進めた。また、児童生徒の成長を考え、命の大切さ、自分自身の生き方を考える人権教育にも関連させ、各行事やそれぞれの取組みで部会テーマを達成するための研究を深めていくことを確認してスタートした。

23年度研究テーマ 「自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成」

～つむぎ合う15年～

- ・認め合いはげましあう児童生徒の育成をめざす教育実践
- ・一人一人の自尊感情を高める教育実践
- ・コミュニケーション能力を育む教育実践

② 経過

4/20	第1回部会 第1回目 Q-U 実施 生活・健康調査	研究内容の決定、研究の全体計画、役割分担 実施機関 1回目実施期間
5/18	第2回部会 かわうそ未来塾 中2わくチャレ	清流を守る事業、(提案) アンケート内容確認, Q-U 分析 (公民館からの通学合宿)
6/29	第3回部会	合同運動会 (提案)
7/3	清流を守る事業	実施・事後アンケート実施
8/5	第4回部会	1学期総括・合同運動会・文化祭について, Q-U、 生活アンケート
8/6	人権平和集会	人権平和集会
8/23	合同職員会	仲間づくり部会提案 (合同運動会・合同文化祭) 校内研修 (講師: スクールカウンセラーによる)
9/2	生活・健康調査	2回目実施期間 (小学校12月・中学校10月)
9/18	合同運動会	事後アンケート
10/5	第5回部会 第6回部会	文化祭に向けて、運動会アンケート集約 2学期の総括・校内研修のまとめ分担確認
12/7	第7回部会	2回目 Q-U 集約・人権平和集会反省
1/18	第8回部会	研究のまとめ

③実践報告

ア. 異学年交流

かわうそ未来塾

a 目的

平成12年より4・5年生を対象に通学合宿「かわうそ未来塾」を開催し、本年度で11回目の未来塾となる。未来塾では、日常の生活の場である家庭を離れ、公民館で集団生活を行いながら通学し、子どもたちの自主性・忍耐力・協調性を養うことが目的の事業である。地域の方々の中でのつくる実行委員会や公民館が中心となり、多くのボランティアの参加を得て行っている。

b 実施

本年度は、5月29日(日)～6月4日(土)の日程で実施した。参加児童は、4・5年生全員で25人。ボランティアの方々に支えてもらいながら、炊事、洗濯、食事の準備などを自分のことは自分で行う。今年は台風の影響で入所式が中止になり、1日短い未来塾となった。普段体験することが出来ないことなど(防災教室、グランドゴルフ、昔の話、日本の文化、たこ焼き・クッキー作り、はえ縄漁しかけ、カヌー教室)などを体験した。天候の関係で、釣りや天体観測が中止になり、天体観測では天体に関するクイズ大会に変更となった。日本の文化ではお寺の住職に来ていただき、子どもたちが座禅を組み、瞑想を行い、精神統一を行うなど貴重な体験をすることができた。



c 成果と課題

様々な経験を通して『自分のことは自分でする力を身につける』『困っている人がいたら助けてあげる、相手を思いやる気持ち』『みんなと協力して活動に取り組む』など集団生活を体験することで、子ども一人ひとりの協調性を育むことができる一週間となった。班で行う活動も積極的に行動することができ、学校とはまた違った子どもたちの様子を知ることができた。

課題としては、この間の様々な体験活動を「学ぶ意欲」にどう結び付けるか。地域の多くの方々の力を借りての取り組みである。教師自身が、この活動の意義をどうとらえ、教室での学びにどう関連付けるか。未来塾が終わってからの地域の方たちとの連携も持ち方にもどう生かすか。それはこの事業に関わる教職員の課題でもある。

また、子どもたちの年長者に対する言葉づかい・態度が気になった。子どもは目上の人に対して友達言葉で、大人の方は子どもたちに対して丁寧な言葉で会話をしていることに違和感を感じた。言葉づかいもそうだが、態度も友達と接しているようで、その雰囲気のごく普通に進んでいることに対して課題を感じた。「言葉の乱れは心の乱れ、心の乱れは言葉の乱れ」というように、場と状況に応じて、丁寧な言葉づかいが出来るように、子どもたちが社会に出ても通用するように日頃の指導に取り組まねばならない。

さらに今後、児童数減少に伴い来年度は4・5年生を合わせて10名となる。この少人数では、3班に分けての活動では無理がかかってくることも考えられる。いかに子どもたちだけの力で活動できるようにするか。大人が見守るけれども手を貸さないという立場に立ち切れるかが課題と思われる。

清流を守る事業

a 目的

- 新莊川流域の環境美化活動を通じて地域を愛する心を育む
- 奉仕活動を通じて社会の一員として社会に貢献する意識を養う
- 水棲生物調査活動を通じて水質保全についての意識を高める
- 小・中学校の縦割り集団での活動を通じて相互に助け認め合う仲間作りをすすめる

b 具体的実践

清流を守る事業は小学1年生から中学3年生まで全校で取組んだ。

(a) 事前班会・班旗作成 6月9日(火) 5・6時間目

8班構成で小学5年生から中学3年生までを班員として構成した。また、班旗の作成は班ごとに放課後の時間も使って、小中学生共同で完成させた。

(b) 環境学習 6月30日(木) 5・6時間目 体育館

6月30日体育館で小学5年から中学3年生までを対象に『哺乳類について』の学習会を四国自然史科学研究センターの谷地森さんを招聘して行った。環境学習の一環として新莊川流域にもいる哺乳類にも関わった話をしてもらった。また、観察用に捕獲したりする道具なども紹介してもらい、興味を持って参加できた。

(感想) *ぼくは、哺乳動物のことがよく分かりました。ニホンカワウソがもういないことは知っていましたが、1978年頃に姿を消していたことが分かって、もうそんなにいないのかと思いました。また、あるコウモリは、新莊川にだけ巣があることが分かって、上分にもけっこういるんだなあと思いました。

*ネズミ、コウモリ、モグラ、キツネ、タヌキなどのことが分かりました。谷地森先生は、毎年来て、色々なことを話してくれます。来年はどんな話をしてくれるかとても楽しみです。



(c) 実地活動

7月3日(日)環境美化活動は各班ごとに8地区をそれぞれ割り当て、班旗を振って道路を通る自動車へ環境美化を訴えるとともに、道路の清掃活動を行った。小学生によるシュプレヒコールや水生生物の発表、小中学生による班旗とスローガンの発表、内水面漁連と新莊川漁協組合の協力をえて、鮎の放流を平野の川で行った後、楽しんで泳ぐことができた。



C 成果と課題

清流を守る事業の活動の後に取った自尊感情アンケートの結果をみると、「一生懸命がんばった」「みんなで協力してできた」などについては、小・中学生全員が高い意識を持っていたことが分かった。がんばった内容として、小学校低・中学年は、「シュプレヒコールや水生生物調査をがんばった。」「ゴミ拾いをがんばった。」、高学年・中学生は、「班旗作りやゴミ拾いをがんばった。」が書かれていた。中学3年生のアンケートには、「班員をまとめることをがんばった。」という記述もあった。小中合同の班旗作りや環境美化活動を通して、児童生徒間の連帯感や協力を深めることができ、地域の環境美化に関する意識付けもできたと考えられる。しかし、「友達から頼りにされている」「がんばった自分が好き」の項目になると、小学校の高学年や中学生の意識は低い傾向が出ていた。行事の取組だけでなく日常の活動も通して、児童・生徒同士の関係を作りながら自尊感情を高めていく取組をどう進めていくのかが今後の課題になっていくと考えられる。

人権平和集会

a 目的

21世紀は人権の世紀といわれる。人権侵害の最たるものは戦争であるが、その戦争は自分たちと異なることを認めようとせず自分たちの利益のためならば他者を排除しても構わないという利己主義的な考えから起こってしまう。この時期に人権と平和について考え二度と過ちを繰り返すことのないように、互いに違いを認め合い一人ひとりが大切にされることの大切さを感じ取らせる。小中一貫校として、児童生徒が異年齢集団の中で互いに関わり合うことで、日常の学校生活では見失いがちになっている気になる児童生徒の自尊感情を高めたい。

b 具体的実践

互いの違いを認め合い、一人一人を大切にする仲間づくりの大切さに気付かせるために、小中合わせた縦割班でグループエンカウンターの手法を取り入れたワークショップ。

1部①開会のあいさつ

②仲間づくりゲーム

③お礼のあいさつ

2部

①戦争、平和の話(小1～4年)

平和学習紙芝居、被爆体験談(小5～中3)

②「人権平和の木」へのメッセージ記入



c 成果と課題

小学1年生から中学3年生まで児童生徒が協力しながらの活動はよかった。しかし小中交流学习などを行っているわりにはリーダー的存在の子どもが育っていないのではないかと、異年齢の子どもどうまくコミュニケーションがとれないという課題が見えて来たので、今後リーダーの育成、コミュニケーションの力を育てる取組みをしていきたい。

合同運動会

a 目的

上分小中学校合同運動会では、小中一貫教育、地域連携、保小連携を重点に取り組んでいる。今年度も運動会の目標を「児童・生徒自ら活動する場を設定することにより、自主性・責任感を育てるとともに、日々の体育活動の成果を十分に発揮させる」「異学年交流を通じて活動することにより、相互に認め合える仲間づくりを進める」と設定し、学校・保護者・地域と連携し、子どもたちの成長、活躍を地域ぐるみで応援しながら取り組んでいる。

b 具体的実践

合同運動会に向けて、毎年夏休み前から児童会・生徒会を中心に運動会のスローガンを決定

している。今年度は、中学校「一心不乱～勝利を目指して！～」、小学校「全力をつくして最後まで！」とし、児童生徒による評価活動を行った。

係活動も小学4年生から中学3年生までが協力して取組んでいる。児童生徒数の減少に伴い、教員が支援する場面が増えているが、中学生がリーダーシップをとりスムーズに競技進行を行うことができている。

種目については、異学年交流、小中一貫、保小連携を図るため、小学1・2年生と中学3年生、小学3年生と中学1年生、小学4年生と中学2年生がペア学年となつての交流種目、小学5年生と年長保育園児の「もうすぐ1年生」、小学4・5年生と中学生全員によるフォークダンス、小学6年生と中学生全員による「上分ソーラン節」を設定し、練習から小中合同で取組むことで高学年や中学生の自主性・責任感の向上に繋がっている。

c 成果と課題

今年度も、保育園児・児童・生徒・保護者・地域と一体となり、運動会に取組むことができた。全力でそれぞれの種目に取組んでいる児童生徒の姿を、地域保護者の方が温かく見守り支えている。異学年交流、小中一貫、保小中連携を図る実践を重ねることで、保育園から小学校へ、小学校から中学校へ安心して進学できる基盤づくりができている。低学年の児童から頼りにされることで、高学年・中学生の自尊感情が高まっている。

合同文化祭

a 目的

- 学習発表の場として活用し、児童生徒の表現力を高める
- 保小中連携を図り、お互いに認め合える仲間作りを進める
- 中学校区の取組として、地域をあげての活動にする

b 具体的実践

今年度は、「Peace&Piece」（平和のかげら）のテーマのもと保小中が文化祭に取組んだ。このテーマは生徒会が「今年は3月に東日本大震災があった年なので、みんなの平和への思いと一人一人の力を合わせて、すばらしい文化祭をつくりたい」との思いで決めたものである。

ステージ発表では、児童会生徒会合同の群読から始まり保育園児、小中各学年の取組、英語暗誦、小中全児童生徒による合唱・合奏が行われた。パネル発表では、児童生徒の作品や学習の様子他に地域の方による多数の作品も展示された。また、地域の方への昼食販売も例年通りに行われ、午前だけでなく午後もたくさんの方が参観して文化祭を盛り上げてくれた。

c 成果と課題

ステージ発表では学習したことや創意工夫したことをそれぞれの特色を生かして発表することができ、参観した方からも頑張りを評価する声をたくさんもらった。パネル発表では小中の交流の様子を展示し、地域の方の多彩な作品も展示され地域と一体になった取組になった。小中合同

の取組は、発表だけでなく準備の段階でも中学生と小学校高学年とで一緒に行った。また保護者の方は、昼食の準備や後片付けを協力してくれ、みんなで文化祭を支えることができた。

児童生徒のアンケートでは「いっしょうけんめいがんばりました」、「話や意見をしっかり聞きました」、「みんなで協力してできた」、「友だちのよいところを見つけた」、「文化祭をしてよかった」など肯定的な意見が多かった。学年によっては、「自分の意見や考えを伝えることができた」、「友だちからたよりにされている」、「文化祭に向けてがんばった自分が好き」が低くなっている。文化祭を通じて達成感を感じてはいたが、自分から積極的に意見を言ったり、友だちと関わったという面での評価が低かった。学級や小中全児童生徒による合唱・合奏の取組の中で、自分たちで考えたり、意見や考えを言う場面や友だちと関わる場面を作る必要がある。教師があまり出すぎることなく、児童・生徒が主体的に活動する形に変えていけば、自己肯定感や表現力も高まっていくので、配慮していきたい。また、小中合同発表では練習時間が不足していたので各学年の練習と兼ね合いながら確保したい。また、発表の声が聞こえにくいなども課題として残っている。

イ. 交流授業・交流活動

a 目的

小中一貫校という当校の特色を生かし、より小中の連携を深めるために小学校、中学校の異学年の交流授業を行っている。平成21年度から、小学3年生と中学1年生、小学4年生と中学2年生、小学6年生と中学3年生という組み合わせで実施している。

b 具体的実践

今年度は、以下のような内容で交流学习を実施した。

交流学年	1 学期	2 学期	3 学期
小3と中1		<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい体操(1h) ・紙芝居読み聞かせ(朝読書の時間に。2週間で6回) ・合同音楽(1h) 	
小4と中2	7月 合同水泳&給食(2h)	9月 運動会交流種目	
小6と中3	6月(4h) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;">「将来の夢を考えよう」</div> <ul style="list-style-type: none"> ・なりたい仕事アンケート ・ペア分け ・調べ学習 	10月 <ul style="list-style-type: none"> ・調べ学習(1h) ・プレゼン&発表(1h) 	3/1(1h) 学校橋クリーン大作戦



c 成果と課題

レクリエーション、調べ学習などの取組みの中で、互いに協力し合っただけでなく、かかわり合う場面が多くあり、お互い異学年間のコミュニケーション能力を高めることができています。

中学生は、様々な交流の中で先導し、かかわり合いのきっかけを作ることでリーダーとしての意識が高まったり、小学生が興味・関心を示しそうなことを考えて練習したり、その成果により自信をつけ、自尊感情を高めることができています。

小学生は、交流を通して上の学年から学ぶことが多くあり、かかわり合いの仕方や、調べ学習の仕方、人に教えるという経験ができた。普段、自分からかかわれない児童も、中学生の働きかけによって、交流ができたという成果もあった。

年間計画を立てたものの、天気などの都合によって計画した学習ができないことがあった。実施した学習の計画が不十分なことと、教師の手が入りすぎたことで生徒に考えさせる場面がうまくいかなかったこともあった。1年間を通しての計画と目的をはっきりさせ、児童・生徒主体で運営・企画について取組ませる必要がある。その中で「どんなふうにかかわるのか」、「考えさせるのか」ということについてしっかり考えることを来年度の課題にしたい。また、交流したことが普段の生活において、生かされにくいということも挙げられる。交流学习以外の際にも関わり合えるようなきっかけを考える必要がある。

ウ. 地域との連携

a はじめに

上分校区は、地域全体が「子どもは地域の宝」という意識で、保護者だけでなく地域の人たちの協力も多く、「学校支援地域本部事業」で「学校応援隊」の取組みを行ってきた。また、本年度より放課後や夏休み等の子どもたちの安全で健やかな活動場所を確保するべく、「放課後子ども教室」を毎週水曜日に開設している。

学校応援隊のコーディネーターや実行委員の方を通して、地域の方々との連絡調整などがスムーズであるとともに、地域の方々には「学校応援隊ボランティア」として、花壇や畑の整備など学校の環境整備や、行事、授業への参画、交流給食、放課後子ども教室のチャレンジクラブやあいさつ運動などの見守り活動など学校のニーズに応じて様々な場面で支援頂いている。

b 具体的実践

○昨年に学校応援隊の部屋を開設し、地域の方々に応援隊の部屋を有効に使っていただけるよう、学習支援など学校に来ていただいた際に、学校応援隊の部屋で休憩をしていただいたり、子どもたちと学習支援活動を行ったりと、学校に地域の方々が入りやすくなる機会が多くなった。また、このことにより、子どもたちと地域の方々との交流する場や時間が増え、子どもたちと地域、地域と学校がより深く繋がることができてきた。

○「環境整備活動」「学習支援活動」「放課後や休み時間での活動」「クラブ、部活動への支援」「安全確保」など、ボランティアの募集と名簿を作ったが、名簿の活用が出来なかった。

【放課後子ども教室】

通常は、毎週水曜日（職員会で教員が放課後の加力学習をできない日）に15:00より地域の方（現在は保護者）に安全見守り員として30分間の宿題とその後の遊びを見守っていただいている。夏休み中は、プール開放（13:15～15:00）後に15:00～17:00まで開設してきた。その中で、放課後に地域の方と一緒に楽しもうと、チャレンジクラブを実施している。スポーツセンターの方々に来ていただき、ペタンク・グランドゴルフ・ストラックアウトなど普段体験することができないスポーツをすることができた。また、清流クラブの方々に来ていただき、車輪まわし・水鉄砲・おじゃみなどの「昔遊び」を行ったり、食生活改善グループの方々に来ていただき「おイモ料理」を行ったりと、地域の方々と一緒にチャレンジクラブを楽しむ活動も行った。地域の方々が参加してくれることを心待ちにしている子どももあり、このような機会をこれからも増やしていきたい。



【環境整備活動】

清流を守る事業や、総合の授業での川の活動に向けて、事前の葦刈りもしていただいた。たくさんの保護者やボランティア活動の方に来ていただき、スムーズに作業をすることができた。

学校の花壇については、地域の方から「花壇に花を植えてもそのまま手入れをしてくれんき…」という声をいただいた。地域の方の声・思いを聞いた以上その声を大切にしようと美化栽培委員会でも花を植え世話をしているが、今後は一緒に活動できるよう連携をしていきたいと考えている。

【学習支援活動】

今年も七夕飾りを地域の清流クラブの方と一緒に作り、勤労生産活動としての学校農園や5年生の米作りに関わって、畑や田んぼの整備や植付け収穫とたくさんの支援をいただいた。その他にも、収穫したお米でぼたもち作りを行ったり、竹馬作りをしていただいたりと、地域の方との交流は、児童にとって楽しい活動の一つになっている。

c 成果と課題

上分小中学校は、このように様々な活動を通して地域と学校との連携を深める活動をおこなっている。成果として地域の人々とかかわることで、児童生徒はコミュニケーション能力を育むこ

とができた。また、地域の方々が何度も来ていただき、子ども一人ひとりに寄り添いながら指導してくれるため、子どもたちは笑顔と話がたえず、安心して学習に取り組んでいる様子が伺えた。地域には子どもたちと一緒に活動することをとても楽しみにして下さる方々がたくさんいらっしゃる。このような子どもたちと地域の方々と触れ合いの場をこれからも続けていきたい。

しかしながら、上分地域の学校や子どもたちへの思いが親密であればあるほど、地域の方々がまるで家族のような関係になってしまい、言葉づかいや礼儀などが十分とは言い難い。それは結果として、上分の子どもたちが他の地域へ出て行った時に他人ではない他者とのコミュニケーションに困ることとなり、自分の思いや考えを伝えられない状況にもなりかねない。そこで、親しき仲にも礼儀ありではないがどこに行っても通用する話し方や態度を身につけさせなければならない。そのためにも、いつも関わっていただいている方々ばかりでなく、より多様な人々との出会いや関わりが出来るようボランティア名簿を活用した呼びかけやさらなるボランティアの拡充を図りたい。また、放課後子ども教室について、保護者からは回数を増やしてほしいとか、冬休みや春休みの開設を望む声もある。3年生以上になると加力指導もあり、開設しても参加できる児童が少ないため開設をひかえていたが、どのようにバランスを取るかが課題である。



エ. Q-U

a 目的

仲間づくり部会の目的（3本柱）のために、Q-Uテストを行う。

Q-Uテストを年に2回（1学期と2学期）実施して学級の状態を知り、良い方向へ導いていく。

（小学校）

b 具体的な取組み

○Q-U（1回目…5月、2回目…11月）に実施し、学級の状態や個人の状態を知る。

- ・Q-Uの結果から、学級支援シートを作成し、職員会や二部会で支援の必要な児童について共通理解を図り、支援方法を検討する。またQ-Uの分析を専門家にしてもらう。
- ・夏休みには小中合同で共通理解を図る。また、Q-Uの小学校事例校内研修会を開き、心の教育センターの大城由美指導主事にアドバイスをいただき、教職員で支援方法を検討した。
- ・検討した支援方法を学級、ブロック、全教職員で取組む。
- ・年度末にもう一度、学級や個人の様子を確認して、次年度へつなげていく。

c 成果と課題

- ・Q-Uの分析を通して、学級の状態や支援の必要な児童生徒が把握でき、全教職員で共通理解をはかり、今後の支援方法を確認できた。
- ・小学校では講師を招いて定期的にQ-U事例研修会ができ、分析の仕方やポイントについて研

修し、支援方法を全教職員で話し合うことができた。

- ・具体的な実践を行ったことで、自尊感情を育てることができた学級があった。

(中学校)

b 具体的な取組み

5月：Q-U実施1回目

6月：分析検討会(学年会→職員会・二部会で報告し共通理解を図る)

- ・調査、アセスメント
- ・これからの取組みの方針
- ・手立てと計画

実践：学校全体で支援が必要な生徒に対して、担任が個別面談等を行い対応し、学級でも実態に応じて構成的グループエンカウンター等の人間関係づくりの取組みを行った。

11月：Q-U実施2回目

12月：分析検討会(学年会→職員会・二部会で報告し共通理解を図る)

- ・これまでの取組みの評価
- ・今後の改善点

3月：振り返り

c 成果と課題

- ・Q-Uの分析を通して、学級の状態や支援の必要な生徒が明らかになり、ペグシグナルを示す生徒に対して個別面談等を行い支援することができている。
- ・Q-U実施後、すぐに対応することが課題であるが、全体的には改善の方向に向かっており、Q-U分析後、担任だけではなく全体で支援がきている結果がでている。

オ. 生活アンケート

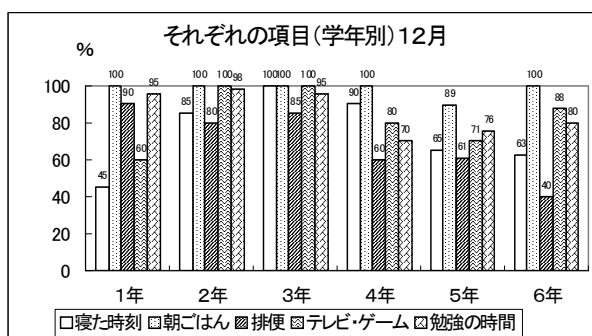
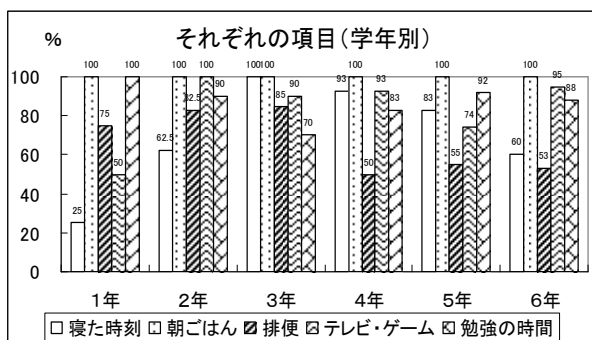
a 目的

児童生徒の生活実態を把握し、基本的な生活習慣の定着をはかる。

(小学校)

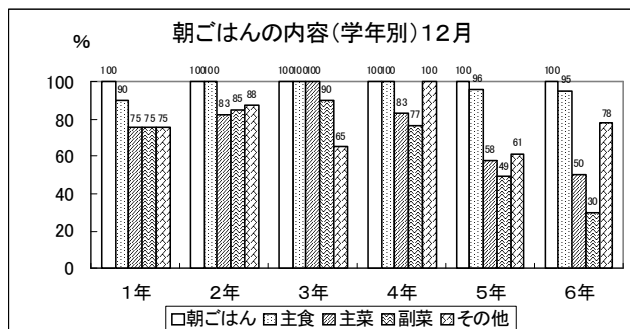
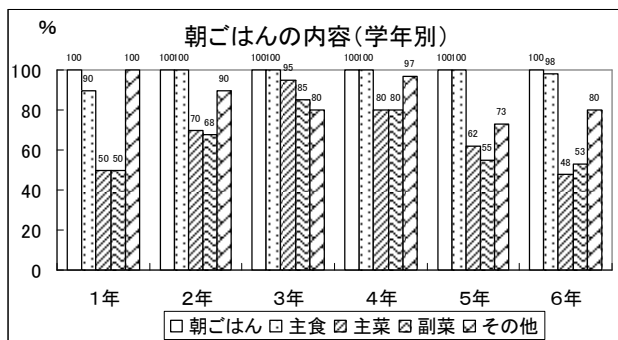
b 具体的な取組み

5月と12月に5日間生活実態調査を行った。就寝時刻、朝食(朝食の内容)、排便、テレビ・ゲーム、勉強の時間を各学年で目標を決め、取組みを行った。



《学年別…それぞれの項目》

- ・高学年の就寝時刻が遅くなっている。夜遅くまでテレビを見ている子どもが多い。低学年の就寝時刻が遅くなっている子どもは、大人の時間に合わせている。
- ・排便は毎日出ない子どもが、6月には70%、12月には60%の子どもがいる。
- ・テレビ、ゲームの時間は、学級で決めた目標時間を守れている子どもが多かった。しかし中には3時間以上テレビを見ている子どもがいる。また、テレビをずっとつけている家庭もある。



《学年別…朝ごはんの内容》

- ・100%朝ごはんを食べてきている。しかし、主食を食べていない子どもが高学年にいる。
- ・12月の生活実態アンケートの前に朝ごはんの紙芝居を行った。その後低学年では、主食以外を食べてくる子どもが多くなった。



c 成果と課題

生活実態調査の結果を個人カードにし、1, 2学期の個人面談に時に保護者に返すことができた。生活実態調査を行うことで、保護者や子どもたちに自分たちの生活リズムをふり返り、規則正しい生活習慣を意識づけていく1週間になっていると感じる。

また、生活実態調査の結果を教職員で把握することで、子どもたちの状態を知り、生活指導を一緒に行うことができた。

来年度も家庭と連携しながら、子どもたちの規則正しい生活習慣に取り組んでいきたい。

(中学校)

b 具体的な取組み

生活・健康調べ(1起床時刻 2朝食の有無〈食品数〉 3体調 4家庭学習時間 5ゲーム・テレビ等視聴時間 6排便の有無 7就寝時刻 8反省・感想)を5月・10月に実施した。

*起床時刻 ・平均起床時刻は、5月：6時21分 10月：6時37分

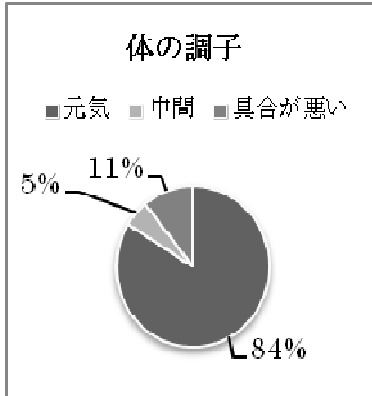
・朝、7時までに起床している者が、5月：91.2% 10月：83.4%

*就寝時刻 ・平均就寝時刻は、5月：10時49分 10月：11時4分

・夜、11時までに就寝している者が、5月：71% 10月：60.3%

*睡眠時間 ・平均睡眠時間は、5月：7時間32分 10月：7時間35分

・7～8時間の睡眠時間の者が、5月：45.7% 10月：44%



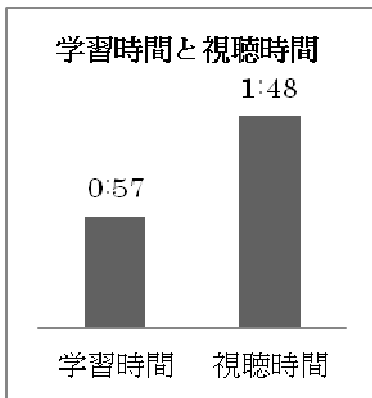
*体調 ・元気な者が、5・10月：84%

・元気ということができない中間の者や症状を伴う者が16%。この中には、就寝時刻が12時を過ぎている者が多く見られ、睡眠不足が体調不調の原因となっている。

*朝食 ・摂取状況は、5月：99% 10月：100%

・3品以上の者が、5月：86.9% 10月：85.8%

*排便 ・毎日排便がある者が、5月：67% 10月：68%



*家庭学習時間

・平均学習時間は、5月：1時間4分 10月：57分

・1時間以上の学習の者が、5月：58% 10月：57.1%

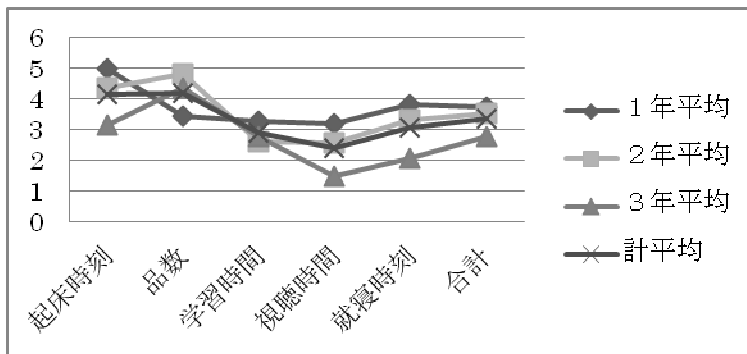
・学習時間0の者が、5月：11.5% 10月：11.2%

*ゲーム・テレビ視聴時間

・平均視聴時間は、5月：1時間32分 10月：1時間48分

・1時間以内の視聴の者が、5月：54.5% 10月：47.3%

・2時間以上の視聴の者が、5月：26.8% 10月：34%



* 5項目を評価

- ・早寝 (夜11時までに寝る)
- ・早起き (朝7時までに起きる)
- ・しっかり朝ごはん (3品以上食べる)
- ・毎日学習 (1時間以上の学習)
- ・ちょっとだけゲーム・テレビ

(1時間以内の視聴)

c 成果と課題

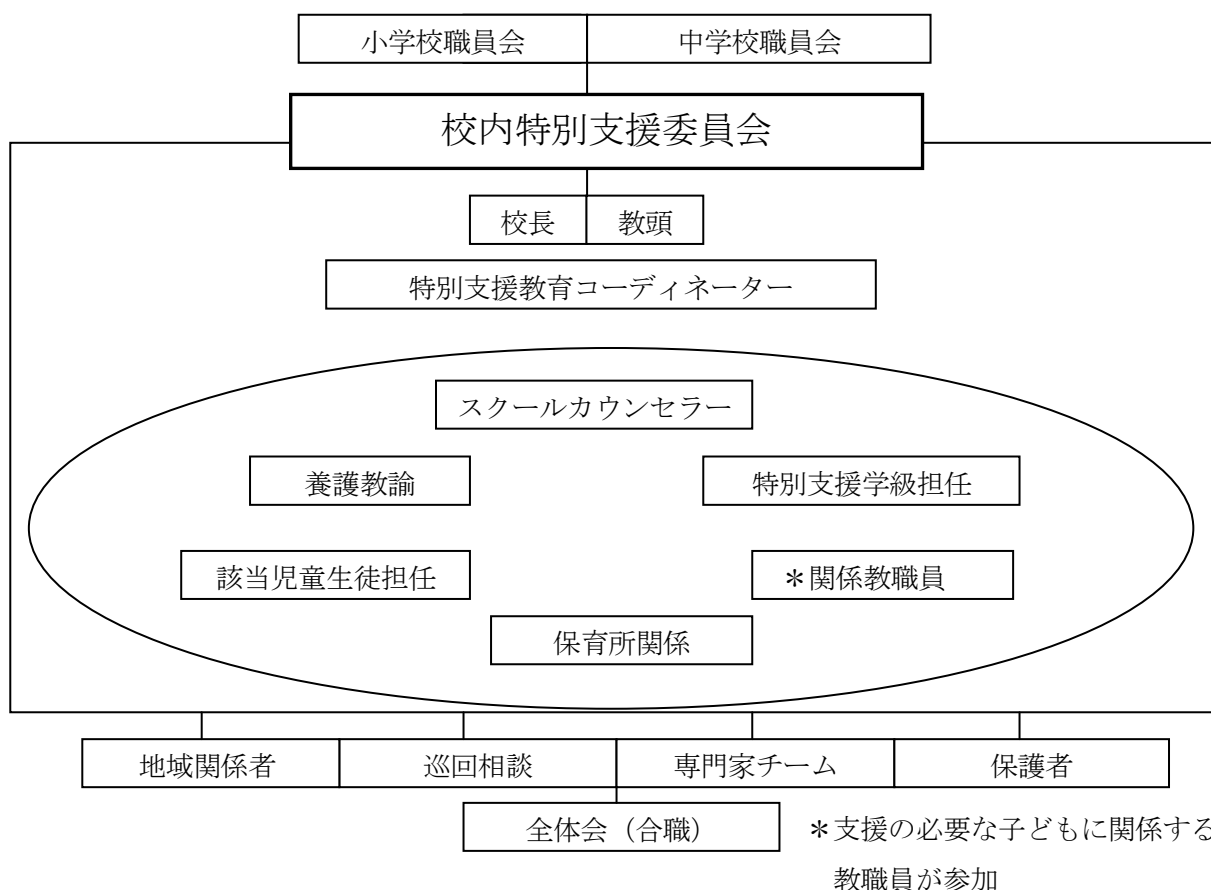
生活アンケートの結果を職員会で話し合って実態把握を行い、個人面談時には、各家庭・保護者にも話す等、生活習慣の改善に取り組んできた。早起きとしっかり朝ごはんは、良い改善が見られる。しかし、学習時間の倍の時間がゲーム・テレビ視聴時間に費やされ、その為に就寝が遅くなっている。1時間以上の家庭学習をしっかり行い、ゲーム・テレビの視聴時間を少しでも減らし、早く就寝することが課題である。今までの習慣化した生活を変えることは難しいが、今後も個人指導や家庭と連携しながら基本的な生活習慣の定着を継続していくことが大切である。

4. 校内特別支援委員会の取組み

(1) 目標

保育園を加えた小中全校的な支援体制を確立するため、校内特別支援委員会を設置し、その中で支援シートを使いながら教職員の共通理解を図り、児童生徒への指導、支援のあり方を進めていく。

(2) 組織



(3) 校内特別支援委員会・全校研修会の取組み

- ・校内特別支援委員会（6回：4・7・9・12・1・2月）
- ・全校研修会（1回：8月）

(4) 取組み内容

- ・校内特別支援委員会

1・2学期は、15時50分から上記のメンバーが集まり、校内特別支援委員会を開いていたが、実施時間の問題や保・小・中の支援の必要な子どもの把握と情報の共有に止まり、具体的な支援や対応策について話し合うことができなかった。3学期は、中1ギャップの解消や小中一貫した指導の継続等、小中合同で開催することの意義をふまえ、支援の必要な子

どもに対する指導方法や支援体制を検討することができるように、実施時間と校内特別支援委員会のメンバー構成を見直し実施した。又、児童生徒の支援にあたっては、小中別で担任・学年・養護教諭・支援員・特別支援コーディネーター等、実際に支援にあたるメンバーでケース会議を開き、個々のチームで支援を行い、巡回相談やその子どもに必要な講師を招いての研修会を実施した。

学期	月 日	内 容
1 学 期	4/25(月) 16:00~16:45	第1回校内支援委員会…組織・会のあり方の確認・年間計画 児童生徒への支援について（支援シート）
	5/17(火) 15:45~16:45	中学校研修会…発達障害の支援について 須崎くろしお病院言語聴覚士 森下浩充先生
	6/1(水) 15:30~16:45	小学校研修会…自閉症児童への支援方法について 高知県立療育福祉センター発達支援部 堀内教代先生
	7/7(木) 15:50~	第2回校内支援委員会…保・小・中の子どもの報告（支援シート） 夏休みの支援方法
	7/8(金) 15:45~16:45	中学校研修会…不登校について 高知県立心の教育センター 大城由美指導主事
	8/23(火) 13:00~14:50	全校研修会…発達障害について 上分小中カウンセラー 横山 久先生
2 学 期	9/2(木) 15:50~	第3回校内支援委員会…小・中の子どもの報告（支援シート） 夏休みの支援の報告と2学期の支援
	9/27(火) 15:45~16:40	中学校研修会…学習支援について 巡回相談員派遣事業実施
	12/1(木) 15:50~	第4回校内支援委員会…小・中の子どもの報告（支援シート）
3 学 期	1/12(木) 14:45~15:40	第5回校内支援委員会（個別の指導計画） 中学校…中1検討（担任・校長・小中教頭・支援員・SC・小中コーディネーター）
	15:50~16:45	小学校…小5検討（担任・校長・小中教頭・支援員・SC・小中コーディネーター）
	2/17(金) 15:40~16:45	第6回校内支援委員会 保・小学校…保育年長組検討（保担任・保園長・校長・小中教頭・小全教諭・支援員 小中コーディネーター）
	2/24(金) 16:00~16:45	中学校研修会…不登校について 高知県立心の教育センター 大城由美指導主事

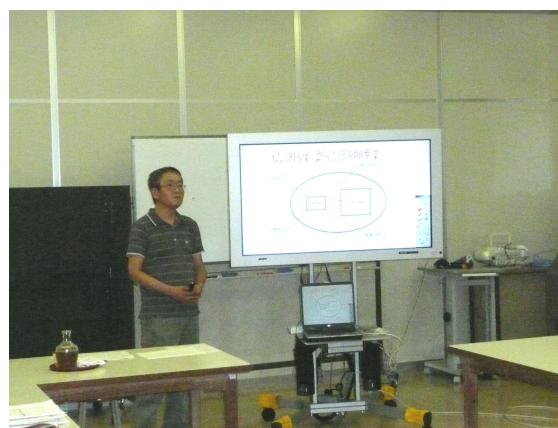
・全体研修会

上分小中のカウンセラーである横山久先生に、「発達障害について」の講話をしていただいた。

主に、発達障害の診断に関する専門的な内容で参考にはなったが、学校は診断を下す場ではないので、実践に結びつく内容ではなかった。

今後は、本校の児童生徒に関することや具体的な状況、障害に応じた支援や指導の実践例等の紹介をしていただき、日々の児童生徒の指導に

活用できる講話を希望したい。又、保護者や地域との情報発信や連携をはかる為に、SC通信の発行を要望していたが、実現しなかったのが残念である。



(5) 成果と課題

2学期までの校内特別支援委員会は、小中合わせて多数の児童生徒についての報告で終わり手立てや課題について深く話をする事ができなかった。3学期からは、小中に分かれて対象者を絞ることで、個々への具体的な取組みや変容が話されるようになった。そして、校内特別支援委員会の内容は、小中の職員会や合職において報告がされている。

支援シートより個別の支援・指導計画に変更した。実態や状況が把握でき見通しを持った目標や手立てに結びついており、継続的に使える形になった。学習面だけでなく、生活面や精神面の支援が必要な子どもに対する対応や指導を一致させていくことができるよう、今後も全教職員で共有されるようにしていく必要がある。

小中別に個々のチーム支援と必要な講師を招いての研修会が実施でき、具体的な支援や指導に取り組んでいるが、専門家との連携を図ることで、一人ひとりの課題にそったチーム支援を継続し、より一層、小中教職員の連携をはかっていくことが大切である。

5. 人権教育推進委員会の取組み

(1) 人権教育推進目標

本校は、人権教育目標として次のねらいを定めている。

(小学校)

人とのつながりのなかで、人権文化を創造する子どもの育成

(中学校)

発見・確認・行動を通じて人権尊重の精神を育成する

人権問題に対する意見や態度を養う

人権問題に対する認識を深める

人権問題を見抜く

(2) 取組み

上記のような目標のもとに児童生徒を育成するには、学級をはじめ学校生活全体の中で、自らの大切さや他の人の大切さを児童生徒が実感できるような集団をつくることが重要である。今年度は、小中それぞれの人権教育主任が仲間づくり部会の中に属し、仲間づくりに取り組んだ。夏休みには、人権教育の視点から人権平和集会を企画することができた。また、職員会では、特別支援委員会からの報告をもとに支援の必要な児童生徒についても話し合い共通理解をはかった。教職員間の共通理解を持つこととあわせて、研修を深めることで、課題と成果について主体的に見直す体制を取った。

(3) 成果と課題

小中一貫校としての特色を生かした小中合同の運動会や文化祭、敬老行事等の活動を通じて、地域の方や高齢者の方とのかかわりを深め、人権課題に取り組むことができています。また、児童生徒だけでなく就学前の園児についても一人ひとりの実態を把握し、支援体制やその対応を考えることができた。小学校では、「いじめアンケート」を実施し子ども同士のお互いを思いやる気持ちを考えさせた。2学期には、小中同じ日程で人権参観日を実施し、多くの保護者にも参観していただいた。また、授業の後、須崎市の人権交流センターの事業である「子ども人権講座、人権コンサート」を鑑賞し音楽を交えた講演を児童生徒とともに聞き男女共同参画社会への意識付けを図ることができた。年間の研修を通して日常活動への支援策を考えるなど、自己肯定感を高め、他人を思いやることのできる児童生徒の育成が進められてきている。

今後も、子どもたちのよりよい人間関係づくりを柱に、更に幅広い視点からの人権教育を推進していきたい。

そのために、教職員が一体となった人権教育の取組みを継続し、体制を整えて、家庭や地域からの意見を生かせるよう、地域ぐるみの人権教育推進の体制についても整備していきたい。

6 おわりに

小中一環教育は今年で8年目が終わろうとしている。今年度の研究テーマ『自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成 ～つむぎ合う15年～』に取り組んで3年目である。研究テーマを決め、さらに小中別のサブテーマを設定し、その実現により近づくように取り組んできた。小学校6年間では中間検証の年。中学校での3年間では検証の年と言えるだろう。

さて、今年の実践の成果は、小中の研究主任や一部の教員がまとめたものではなく、多くの小中教職員が何らかの形でこの研究紀要に関わった。このことは、本校の小中一貫の連携（協働）そのものである。それ故に、小中教職員が「学習研究部会」と「仲間づくり部会」に属し、計画・立案・実践を通して研究テーマに少しでも迫ることができたのである。

学習研究部では、小中合同の全校授業研究を3回行うと共に、全教員が研究授業や公開授業を実施し、自分の授業に対するPDCAサイクルを実践することができた。授業研究や公開授業では、基礎基本の定着や、児童・生徒の表現力を高める取り組みも行われた。

仲間づくり部会では、学校行事や、地域との交流行事を通して児童・生徒が小中一貫教育の良さを生かした、小学生と中学生の交流や一緒に活動を行なった。そしてこれらの活動を通して表現力の育成を図った。

さらに、学力調査を活用しての基礎学力定着の分析、Q-Uでの仲間づくり・学級づくりの分析、生活アンケート等々を実施し、いろいろな分析・検証を行い、PDCAサイクルを実践して改善を図ってきた。

以上のような取り組みを実践してきたものをまとめた、この研究紀要を読んでもみると、中間検証・検証の年として、一定の成果は出ていると評価できるのではないだろうか。小中一貫教育の成果も現れている。

しかし、児童・生徒の様子を見ると、まだまだ十分とは言えない。学習研究部会の反省の中で、研究テーマをもっと具体的な表現。何に取り組むかがはっきりした表現に変えることで、もっと明確な方向性や方法に向かって行けるのではないだろうかとの課題が出た。そこで、来年度は3年間継続してきた研究テーマの方向性は変えずに、テーマに迫ることのできる具体的方法を盛り込んだ表現に変えるように検討を始めた。そして、主テーマを受けて、小学校・中学校それぞれの具体的な取り組みが分かるテーマを作成するようにしている。これもPDCAサイクルの実践である。

少しずつではあるが、評価し、改善・立案し、実践して行くPDCAサイクルを校内研究の中にも取り入れ、今年度の課題は今年度中に改善し、来年度へ繋げていくことにより研究が一步でも前進していくようにしている。

最後に、本校の教育活動を支えて下さった、保護者、地域、上分公民館、上分体育会、上分学校応援隊、須崎市教育研究所、須崎市教育委員会、高知県教育委員会、関係諸機関の皆様等の関係各位に心より感謝とお礼を申し上げます。今後も、ご協力、ご指導、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

平成24年2月